

アトリエ 琉游舎 だより 241号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年10月7日発行

♪ 静かな 静かな 里の秋 ♪ 明るい 明るい 星の空 ♪ さよなら さよなら 椰子の島

- ある年代から上の世代は、音楽の時間に歌った記憶がある「里の秋」の一、二、三番の冒頭の歌詞です。私も文部省唱歌の時代に育ったので、殆どの童謡、省歌は歌詞カードがなくても一番は歌うことができます。でも今では唱歌が学校で歌われることもないのでしょう。
- 冒頭の「静かな里の秋」の言葉は、秋の夜長の静かな夜を過す平穏な暮らし、「明るい星の空」からは田舎の自然溢れる豊かな暮らしが想像できます。ところが三番になると「さよなら椰子の島」です。急に歌の舞台が静かな田舎の秋の風景から、南国の島に変わってしまいました。私は、三番の歌詞を知らなかったのが、驚きました。これは何を唄った歌なのか。
- 調べてみると、この曲は終戦までもない時期に、外地から引き揚げてくる復員兵を迎える気持ちと重ねて受け取られ、広く歌われたようです。戦災孤児や引き揚げ、復員など、家族の再会を願う空気が社会に強くあった終戦直後、この歌の静かな旋律や秋の情景が、当時の人に深く届いたようです。因みに三番の後半は「ああ父さんよ ご無事でと 今夜も母さんと祈ります」です。この歌は静かな旋律や秋の情景の中で歌われた反戦歌の趣だったようです。
- ところが「里の秋」は戦時中に作られた「星月夜」が改作された歌でした。元歌は出征した父親を思う気持ちや、南方の戦地を連想させる歌だったようです。戦意発揚、銃後の守りの歌から、反戦、復員の父を待つ気持ちの歌に変わったことに異議を唱えるつもりはありません。父への思いも秋の自然も不変なのに、同じ旋律に乗せられた歌が、片や戦意発揚となり片や反戦の吐露となるのが不思議なのです。何が、その様にさせているのでしょうか。
- 音や言葉が人に語りかける力は、恐ろしいほどの可能性があるようです。双方の歌の根底には、反戦も戦意発揚も関係なく家族の再会を願う気持ちがあるのは、言葉や音が、私たちの心の奥底に無意識にある家族愛を揺さぶるからでしょう。ただ、現代には、理屈抜きに家族愛をかき鳴らす音や言葉がどれほどあるのだろうかとも考えさせられる「里の秋」の歌です。

写経会 11/29 (日) 13時半 **読書会** 10/20・11/3 (火) 13時半

狂言綺語…らしさ

10月に入って夏を振り返ってみると、暑いと思えた時期は7月くらいまでで、8月に入ってから今日までの印象は、暑いよりも涼しい、青空よりも曇り空、日差しよりも雨の印象ばかりだったような気がします。暑ければ暑いでこの暑さはなんとかならないものかと言いつのるはずなのですが、今年のような夏はそんな愚痴も言い立てることができません。たまさか30度を超える日があると暑さに慣れないから今日の暑さは堪えると言っては、草取りをサボることになります。なんと人は言い訳がましい生き物なのか、でもこれが人間らしいと言うことなのでしょう。ところが自然に生きる生き物は、自然らしい生き方しかできないのです。

今年の野菜の出来は、まさしく自然の流れに逆らわないままの成果です。気候の推移と見比べれば、それも納得できるものです。6、7月は高温で推移し、梅雨は適度の晴れ間と降水量だったため、6月末から毎日のように茄子とキュウリが大量に採れました。食べきれないことは予想できたのですが、6月には新たな苗を買ってきて植え、いんげんなどの種も蒔いたところ、8月に入ればたとえ成長が止まりました。日照不足が大きな原因でしょう。9月の半ばまでは収穫可能と計画して育てた夏野菜は、ピーマンとオクラがかろうじて例年の6割、その他はほぼ全滅状態です。日照時間と気温と雨量のバランスによって自然は生きている事を実感した次第です。植物だけでなく動物も同じでした。あくまでも体感ですが、今年は真夏のツクツクボウシも、お盆を過ぎると聞こえるヒグラシの声もあまり聞こえてきませんでした。蝶もトンボもほとんど見かけず、何よりも散歩のときに遭遇するのをなんとしても避けたい蛇との出会いもありませんでした。今年の夏は拍子抜けするくらい、夏らしくない夏だったと言うことが、10月になっての今年の夏の総括です。

らしさとは何かと考えると、そこに最大公約数的な同意はあったとしても、各々が考える「らしさ」は微妙に異なっているはずで、男らしさ、女らしさ、子供らしさ、若者らしさ、老人らしさ、、、「らしさ」を挙げれば切りがありませんが、らしさを社会通念や、いかにもふさわしい様子や雰囲気に関心すること、生きる自由を束縛し、人権を侵すことであるという考え方に私は全面的に同意した上であらためて「らしさ」を考えてみることにしたいと思います。なぜなら人間社会の「らしさ」は自然が自然らしくあるものと異なり、人が社会を構成していく中で各々の性差、年齢、立場、役割に与えられた枠組みではないかと考えるからです。つまり、「らしさ」を保守することは現在の社会通念、枠組みを保守したいがためであり、逆に「らしさ」を否定することは現在の社会に異議を唱えることで、社会変革を志向する立場であると考えられるからです。そして、ある「らしさ」を否定したときに、次に求める社会的枠組みを（それをまた『らしさ』と呼ぶならば）、新たな「らしさ」として提示する必要がある、いまある「らしさ」を否定する者には求められると、考えるからです。そうでない「らしさ」の否定は一步間違えると、単なる身勝手な自己主張となってしまうでしょう。「私らしく生きる」ことが、何のらしさを否定し何のらしさを肯定するのかをしっかりと認識しなければ、私らしさの追求は、果てなき私らしさの海を漂流することとなってしまいうでしょう。

僧侶らしさとは何であるかを考えるとき、私は社会通念の僧侶らしさを体現しなければ、という責務に駆られながら、それが私の考える僧侶なのかという難問にもぶつかります。僧侶は毎朝のお勤め、節目の法要、葬式やそれに関わる供養、生死に関わる相談にのる、ここら辺までが、僧侶の基礎科目でしょう。寺を持つ僧侶は檀家との関係を保つことが恐らく一番重要なことになるとは思われますが、私の場合は、檀家を持たない代わりに、地域社会との関係を作っていくことが、一番の重要な役割と考えています。ただ恐らくその時に関わる人達は、私が僧侶であることも意識しないでしょうし、私は僧侶らしい振る舞いの中で地域社会と関わっていると自覚したことも全くありません。そして私の生活時間の殆どは僧侶の時間と言うよりは、個人、家族、社会の中で生活する「私」「夫」「家族」「市民」「国民」の時間です。そしてそれぞれの時間においても、私はそれぞれの「らしさ」の時間を生きている事になるのです。言うなれば、それぞれの役割の時間をその局面に応じて「らしさ」を演じる者なのです。だから私が僧侶らしさは何かに拘ることも意味がないことなのです。なぜなら1日の内の殆どの時間、私は僧侶の衣を脱いでいるからです。そして毎日の時の流れの中で、求められるままに、様々な「らしさの衣」を纏っている存在が私であるということなのです。

「らしさ」の衣を脱いだ私は「無」です。諸行無常の時の推移の中で、因果が私にいろいろな衣を纏わせているありのままの私です。だから私は「空」です。「空」が分りづらければ、「白紙」と呼んでもいいでしょう。私が何らかの「らしさ」に拘ることは執着することです。執着は自分自身がらしさの呪縛に絡め取られるだけでなく、他者にもそのらしさを誇示することになってしまいます。何と不自由なことでしょう。私は「らしさの」衣がなんであるかを見つけるのではなく、「らしさ」の衣をありのままに纏ったり脱いだりできること、それが私らしさであると考えたいと思います。それは何と自由なことでしょうか。自ずから私を然らしむ、自然らしさの装いです。自然らしい生き方しかできない自然の生き物の仲間入りです。

自然に生きるものが自然の変化に順応して自然らしく生きているのに対し、人間社会はらしさの衣装にがんじがらめになって、何と不自由で苦しい生活を送っていることなのでしょう。例えば政治家が何らかの失言をしたとき必ず言う言葉に「誤解を与えてしまったから前言撤回します」という発言があります。私の真意を受け手が誤解したのは、誤解を与えるような話し方をしてしまっただけで私は悪くないと言うことです。苦しまぎれの言い訳をして黒を白に言いくるめる。そうまでして政治家らしく振る舞うことに執着するその衣は、さぞきらびやかで、ざくざく宝を産み落とす魔法の衣装なのかと思ってしまうのは、私だけでしょうか。